

西欧中世における共通語としてのラテン語

伊 東 泰 治

§ 1 西欧中世の言語事情

1) 現在 EU 加盟諸国の国民は当然のことながら、自国の言語を使用している。フランス人はフランス語を、イギリス人は英語を、ドイツ人はドイツ語をコミュニケーションの手段とする。EU 諸国はあらゆる分野で統合を目指して懸命な努力を続けているが、統合し易い分野と統合しにくい分野がある。ヨーロッパ統合は、欧州石炭鉄鋼共同体から始った。歴史的に見ても昔から「物」は国境を越えて流通し易かった。例えば古来塩の道があって、オーストリア、ザルツブルク (Salzburg) の東方の Hallstatt でケルト人の採掘した岩塩 (Salz [*< lt. sāl*] も Hall [*< gr. hals*] も塩の意) は、イタリアのアドリア海に、東方の黒海に、北の北海に、西方のフランスに通じる「塩の道」を通して運ばれた。この塩の道は 3 世紀に出来たようである。またバルト海と北海の海底に眠っていた美しいこはくは生活に直接必要のない装飾品だが早くから「こはくの道」を通して南ヨーロッパの諸国に運ばれて女性の身を飾った。

この通商路である「物の道」が「文化の道」になるには、かなり長い年月を経なければならない。言語戦争やエスペラントの歴史が示すように、「言葉」は民族や国家や民族文化との結びつきが強く、「物」ほど身軽ではない。

とはいうものの長い歴史の間に、相互理解を容易にする要件が整ってきた。文法規則の単純化が進み、他国人にも学び易くなったし、翻訳活動が活発になり、二言語併用の地帯や、王族の国際結婚も、民族や国を越えた相互理解を促進した。

しかしなんといっても聖職者を中心とした層ではあるが、中世ではラテン語が長い間共通語の役割を果たしてきたことは否めない。

EC 構想以前から西欧諸国では、多言語の表示はまれではなかった。例えばドイツでは主として観光客や外国人労働者のために、とくに交通機関の表示や案内や、商品、薬等については、その内容説明や注意がきは、自国語の他に英・仏・スペイン語などの複数語でなされていた。それを補うようにトイレ、スポーツ施設には万国共通語的な絵文字が用いられるようになった。

さて将来はどうなるだろうか。現在英語は確かに共通語の役目を果たしているが、各国民とも自国語に誇りを持ち、愛着も強い。何よりも長い伝統がある。

2) この小論では EU の関連において、西欧中世を、とりわけ12世紀前後の言語事情を瞥見してみたい。不本意ではあるが、私の研究の専門領域の関係からドイツが中心となる。

現在のほぼドイツの領域とフランスの領域を統一したカール大帝(*dt. Karl der Große*) は、ラテン名は *Carolus Magnus* であり、フランス名はシャルルマーニュ大帝(*Charlemagne*) である。中世フランスの有名な武勲詩「ロランの歌」ではシャルルマーニュまたはシャルルとなっているが、その中世ドイツ語の翻訳版では Karl である。

カール大帝は768-814年の間統治したが、孫の時代にはすでに三つの国に分割された。ルイ敬虔王の長子 Lothar が、父の後を継いで全権を握ろうとして、2人の弟 Ludwig と Karl と戦って敗れた。後三者の和解が成立し、842年いわゆる「シュトラースブルクの誓約」がかわされた。誓約は自国の軍隊に解るようにドイツ語とフランス語で書かれた。翌843年 Verdun で条約が結ばれて、フランク王国が分割され、次兄の Ludwig が東フランク国王となり、三男の Karl (シャルル禿頭王) が西フランク国王になる。以後両国は別々の歴史を展開することになった¹⁾。

フランス（France, *dt.* Frankreich）はその国名から分るように、西ゲルマン人の一部族フランク（Franke）の国の意であり、ドイツの有名な都市 Frankfurt（原意は、フランク族が利用した渡し場）の Frank- と同じ語である。

しかしながら今日のフランスの地（*fr.* ゴール、ラテン語でガリア）に、クロヴィス（482–511）がフランク王国を建設したのは5世紀末から6世紀にかけてのことで、それ以前は500年を越える長い間ローマの支配下にあった²⁾。そのためローマの文化の影響を強く受けて、フランス人の話す言語もフランク人のゲルマン系の言語とは関係のないラテン系の言語になった。それは、476年の西ローマ帝国の没落以後日常の話言葉、いわゆる俗ラテン語がほぼ600年頃ロマンス語に派生した言語である。（俗ラテン語が600年頃地域ごとに独自に変化していった言語—フランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語を総称してロマンス語という）。

それにともないフランスのメロヴィング王国内のモーゼル河、シェルデ河、セーヌ河の間の地域では、恐らく数世紀にわたって二言語併用の状態が続いたであろう。生成途上にあった古フランス語にゲルマン語のフランクン方言の影響があったし（*ahd.* *garto* – *fr.* *jardin* など借用語は約500）、また逆に一連の重要な文法上の変化がこの頃のドイツ語に現われている。

西フランク王国内部におけるゲルマン語とロマンス語の対立の結果、徐々にフランス語とドイツ語の言語境界線が形成されてゆき、当然のことながらバイリンガルの地域もできた。

ついでに述べておくと、南フランス地方ではオック語³⁾という北部とは違った言語が使用されていた。この地方は11世紀には経済的にも文化的にも、北フランスよりはるかに発展していた。トゥルバドゥールと言われる歌人たちはオック語で新しい詩を作りメロディをつけて歌った。歌と共にオック語は西欧の多くの宮廷に伝播していった。リチャード獅子心王は英語はできなかったが、オック語は読み書くことができたといわれている⁴⁾。

なお北西の半島ブルターニュは、永い間ケルト人の居住地域であった。

3) 海をへだてたブリテン（ローマ名はブリタニア、フランス語ではブルターニュ）の国の言語である英語は、ドイツ語と類似点がきわめて多い。father = Vater, mother = Mutter, door = Tür, house = Haus のように。これは5世紀以後ゲルマン民族の一部族アングロ・サクセン人（*dt.* Angelsachsen）が大陸から移住してきたからである。

他方英語にはフランス語系の単語が多い（借入語）。beef（牛肉）, mutton（羊肉）, bottle（びん）, dinner（正餐）, baker（パン屋）, から money（金銭）, court（法廷）, judge（裁判官）, また uncle（甥）, cousin（いとこ）等生活のほとんど全領域にわたっている。使用頻度によって選んだ2万語のうち、本来のゲルマン語系が19%であるのに対して、フランス語系は36%にもなる。⁵⁾

これは政治的事情に起因する。ノルマンディー公ギョームⅡ（1027-87）は王位継承権を主張して、1066年イングランドに侵入、その年クリスマスの日ウィリアムⅠとしてイングランド王になった。

ついでノルマンディー公家のアンリ（1133-89）は、1154年ヘンリーⅡとしてロンドンに渡り、プランタジネット朝（アンジュー王朝）を開いた。王妃はフランス国王ルイⅦと離婚したアリエノール（英語名エレアノール、1122-1204）で、フランス南西のアキテーヌ公家の出である。従ってロンドンの宮廷では英語ではなく、アングロ・ノルマン⁶⁾と呼ばれるフランス語が使用された。ラテン語で書かれたジェフリ・オブ・モンマスの「ブリタニア諸王の歴史」は、ワース（1100-75）によってフランス語に訳され（「ブリュエ物語」）、王妃エレアノールに献呈された（1155年）。マリ・ド・フランスもケルト民話を素材にした一連のレー（短詩）を、またトマも「トリスタン」をここでフランス語で執筆した。因みに英語による最初のアーサー王物語は、ラーヤモンの「ブルート」であるが、これは上記のワースの書に拠っている。

§ 2 共通語としてのラテン語

1) 多くの国語や方言をもつ西欧ヨーロッパでは、一部の階層においてはあがラテン語が共通語の役割を果たしていた。当時の西欧はキリスト教社会であり、聖書も4世紀末に翻訳されたラテン語訳聖書（ウルガタ聖書）で、これがローマカトリック教会に公認されていたこともあって、ラテン語は何よりもキリスト教会と聖職者の言葉であった。教会ではラテン語で説教し、ラテン語で祈り、ラテン語で歌った。

遠く離れた聖職者同志の手紙はラテン語で書かれた。アベラールとエロイズの愛の書簡も、エロイズがクリュニー修道院長尊者ピエールにあてた亡きアベラールについての懇願の手紙も、また尊者ピエールがローマ教皇にあてた嘆願書も、アベラールの赦免状もすべてラテン語で書かれた。シトー派会士、クレルボーのベルナルが、クリュニー修道院の建築の華美と修道僧の贅沢な生活について攻撃した書簡も、それに対する院長、尊者ピエールの弁明の返書もすべてラテン語である。「無学の聖職者は、戦うすべてを知らない騎士のようなものだ」⁷⁾

アベラールとエロイズの往復書簡のドイツ版とも言えるテーゲルンゼーの手紙は、聖職者とその弟子とおぼしき若い女性とのラテン語の往復書簡である。それを見ると、ローマの詩人ウェルギリウスやオウィディウス、またその著書や書簡がラテン語散文の模範となったキケロ、あるいはホラティウスなどを読んでいたことが分かる。それらラテンの古典作家の書物は、ラテン語を学ぶ者の必読の書であった。

2) 12世紀には、北フランスが西欧における高等教育と学問の中心地であった。とりわけパリにはヨーロッパ各地から人々が勉学のために集まった。その様子をソールズベリーのヨハネス（ジョン。1115?－1180）は、「メタロギコン」（1159頃）の中に書き記している。ヨハネス自身若い時フランスに渡り、パリとシャルトルで多くの著名な学者に学んだ。それはアベラールのようなフランス人教師だけではなく。プティ・ボンの教師アダ

ム（1159頃）は、「学識豊かで、アリストテレスの研究に打ち込んでいた」。ヨハネスに親切に知識をわけ与えてくれたのは、彼がケンブリッジの近くのバルシャム（Balsham）出身の同国人であったからであろう。「明晰な判断をする」ロベルトゥスもイングランド出身であり、ヨハネスは彼に弁証法を学んだ。自由学科の四科を学んだハルドウィンはドイツ人である。

ヨハネスはその後シャルトルで学び、シャルトルの司教として死んだ。シャルトル学派の興隆の基礎を築いたフルベルトゥス（960頃－1208）はイタリア人で、ローマの近郊に生れ、シャルトルで亡くなった。11世紀後期に北フランス、ノルマンディーのベック修道院（1043建立）を知的中心地にした大修道院長ランフランクス（Lanfrancus. 1005－89）は、北イタリア、ロンバルディアのPaviaの生れである。その後継者のアンセルムス（1033－1105）もイタリア、ピエモンテに生まれ、Aosta（北イタリアのフランス・スイスとの国境近く）の修道院に学び、1078年ベック修道院長、1093年カンタベリー大司教とランフランクスのあとを襲った。アンセルムスは「*Credo, ut intelligam* 認識するために信ずるのだ」という有名な言葉を残し、「スコラ哲学の父」と言われた。

多くの外国人聖職者が、教師として司教として故国と同じようにフランスの地で生活し得たのは、ラテン語が共通語として機能したからである。

3) 一番最初に文化を所有したのは、ラテン語に通じていた聖職者たちである。中世初期以来聖職者たちが文化をほとんど独占してきた。文化の各分野にわたるが、まず聖人伝、伝記や教会史、年代記の類では、573年にトゥールの司教に就任したグレゴリウス（538 / 539－594 / 595）が「フランク人の歴史」を書き⁸⁾、メロヴィング王国についての貴重な記録を残した。サン・ドニ修道院々長シュジェール（1081－1151）は、ゴシック建築様式の創始者として有名だが、ルイVIとVIIの友人で、国王が聖地に赴いた1147年摂政をつとめた。様々な適性をそなえていた彼は、肥満王ルイVI伝を書いた。1137年のルイ王の没後間もない頃で、国王礼讃とその死の哀惜を書

き列ねている。

シュジェールと同じ頃、同じように政治に関与し、同じように高位の聖職者で同じパリの精神生活を送ったドイツの歴史家がいる。ミュンヘン近郊のフライジングの司教オットー（1111 / 14－1158）である。神聖ローマ皇帝フリードリヒ I（バルバロッサ）の伯父にあたり、若い時パ리에留学し、サント・ジュヌヴィエーヴの丘でアベラルに学ぶ。1133年頃帰国、シトー修道会の修道士、1147年第二回十字軍に参加、ドイツに始めてアリストテレスの「新論理学」を紹介したほどの多才の人だったが、45才にならないうちに亡くなっている。「天の国」と「地の国」の「二つの国の歴史」と、「フリードリヒの事績」（*Gesta Frederici*, 1157 / 58）を書いた。前者が主著だが、後者でもロンバルディアの自治体についての記述は、その誇り高い自主性をよく捕えている。なおシュジェールは「出来あがったばかりの自己の歴史書の閲覧を請うべくその友フライジングのオットーに送った」⁹⁾。

アーサー王の歴史と伝説を記述した「ブリタニア列王史」の著書ジェフリ・オヴ・モンマスは、セント・アサフ（St. Asaph）の司教であった。この「列王史」をノルマンの詩人ロベール・ワース¹⁰⁾は、1155年頃フランス語に翻案している（「ブリュ物語」）。こうしたラテン語からロマンス語への翻訳が、後の宮廷文学への橋渡しの役を果たしたのである。

自国語による歴史が定着したのは、1200年頃である。これは書き手が聖職者から俗人に移ったこと、聖職者の関心と世界観に基づいた歴史が、俗人の目を通した俗人の歴史に移っていったことを意味する。その萌芽は1150年頃のレーゲンスブルクの「皇帝年代記」（*Kaiserchronik*）や、アングロ・サクソン年代記」などにみられる¹¹⁾。

4) 聖職者はまた世俗の文学にも手を染めている。現在のスイスの東北ザンクト・ガレンの修道士 Ekkehard I（900頃－973）は930年頃ゲルマンの英雄伝説を素材にして「*Waltharius*」（ヴァルタリウス）を書いた。ロー

マの詩人ウェルギリウスのスタイルにならってラテンのヘクサメーターを用いている。新しい物語タイプを試みたのであろうか。

960～70年頃中部ドイツ、ゲッティンゲンの北方ガンダースハイムの女子修道院の院長ロスヴィータ（935頃－975頃）はラテン語の作品を書き残している。それは内容的には、聖人物語と劇と、皇帝オットー I 及び、オットー II の事績の三部よりなる¹²⁾。ローマ喜劇の作家テレンティウス（B.C. 190頃－159）に張り合うようにしていささかみだらな愛の物語を、キリスト教の聖人物語に変容させた6つの劇が印象的だ。ロスヴィータは学識あるドイツ最初の閨秀作家である。

1050年頃ミュンヒン近郊のテーゲルンゼーで「ルーオトリープ」¹³⁾が書かれた。作者は不明で、18の断片が残っているだけである。形式も内容も中世ラテン文学の伝統から離反している。宮廷と騎士の描写には後の宮廷文学の先駆をなすものがうかがえる。

ゴリアルディとかゴリヤルドゥスまたはゴリアスと言われる放浪学僧（学生）は、ほぼ1125年から1230年にかけて世俗的な詩を作った¹⁴⁾。ドイツではこの種の詩人をヴァガント（Vagant）という。遍歴する学生及び学を終えた下級聖職者たちで、彼らは勉学の地に向かう途中、または学を終えて職を求めての途次に、また中には気ままな旅を楽しんだり、ちょっとした冒険を求めて遍歴しながら、酒・女・賭博の歌や、パロディーや諷刺詩、いささか野卑で猥雑で、時には辛辣な反体制的な詩と、教会批判の詩¹⁵⁾を作った。

ミュンヘンの南にあるベネディクトボイエレン修道院で1803年羊皮紙の写本が発見された。その名にちなんで「カルミナ・ブラーナ」（*Carmina Burana*. ベネディクトボイエレン歌集）と名付けられた。上述の遍歴学生たちのラテン語の歌のアソソロジーだが、中に少数のラテン語－ドイツ語、ラテン語－フランス語と45の中世ドイツ語の詩も混在している。作詩者は不明、内容は、1) 教訓・諷刺詩 2) 愛、ダンス、春の歌 3) 酒と遊

びの歌 4) 宗教劇 の四分野にわたっている¹⁶⁾。

当時遍歴学生の中で最もすぐれた詩人と認められていた「大詩人」がいる。実名は不明で、単に「アルキポエタ」(*Archipoeta* = *Erzpoet* 大詩人)と呼び習わされていた。彼は1130～40年頃、皇帝バルバロッサの帝国書記局長で¹⁷⁾であったライナルト・フォン・ダッセル(*Rainald von Dassel*, 1120頃－1167, 1159以降ケルンの大司教)の宮廷詩人で、10篇の詩が残っている¹⁸⁾。1163年秋イタリアのパヴィーア(Pavia)で作った「ヴァガントの告解」は、ハスキンズによれば、「ゴリアルディ最大の詩人が、大司教(＝ダッセル)に献呈したもの」である。その第12詩節は：「飲み屋で死ぬのは私の願い / 臨終の口にぶどうの液を。 / その時天使の合唱は更に喜ばしく響く / こののんべえを、神よ、憐れみ給え」。Langosch は、これはオウィディウスの「*Amores*」II, 10, 35 ff. に拠ったとする。最後の行はルカ伝 18, 13「神様、罪人のわたしを憐れんでください」のパロディーであろう。バルバロッサのミラノ攻略の勝利を機に作られた「皇帝讃歌」は格調の高い詩である。アルキポエタの身分は不明だが、聖書や古典作家の詩を巧みに引用してこれ程のラテン語が書けるのは、聖職者か、その教育を受けた人であろう。

フランスの武勲詩「ロランの歌」をドイツ語に翻訳したのは、Pfaffe Konrad である(同書9079行)。エピローク(9017－9094行)によると、ザクセン公 Heinrich der Löwe は妃 Mathilde (イギリス王ヘンリー II と王妃エレーノール・ダキテーヌの娘, 1168年ザクセン公ハインリヒと結婚)の頼みを受けて、フランスの武勲詩を取り寄せ、コンラートに翻訳させた(9021 ff)。コンラートは「フランス語で書かれた(原)本の中のすべてを(付け加えず、削除せず)まずラテン語に訳し、それをドイツ語に訳した」(9080 ff)と述べている。ラテン語系のフランス語を、訳者の得意とするラテン語に訳すという迂遠の道をとったのは、正確を期する目的からであろうか。

§ 3 *pfaffe* - *capellanus*

ところでこの *pfaffe* は中世ドイツ語辞書によると、(1) 聖職者 (2) 聖職者たるべく教育を受けた者, *Kleriker* (3) 一芸に秀でた者, 芸術家などと言う。

フランスの *Roman d'Alexandre* を、ドイツ語訳したのは *Der Pfaffe Lamprecht* (「*Alexanderlied*」) である。エレアノール・ダキテーヌの娘マリ・ド・シャンパーニュの宮廷でアンドレアス・カペルラヌス (*Andreas Capellanus*) は、ラテンの詩人オウィディウスにならって *De amore* (愛について)、または *De arte honeste amandi* (誠実な恋の方法について) を書いて、宮廷愛を理論づけ、体系化した。1277年パリの司教ステファン・タンピエが名指しで異端の書と宣告した¹⁹⁾この本は、*capellanus* (シャプラン) によって書かれたものである。

ラテン語の *capellanus* は、(1)ドイツ語では *Kaplan* , または *Hofkaplan* , 即ち宮廷の礼拝堂でミサをとり行う聖職者, 司祭であるが、(2)その他に *Kanzlei* (文書局, 官房) の書記, 文書起草官という宮廷の公的な行政に係ったり、(3)宮廷で王妃・王女教育係を担当した。

ゴットフリートの「トリスタンとイゾルト」では、タントリスの章で、アイルランドの宮廷に仕える *pfaffe* (7697行) が登場する。この場合の *pfaffe* は *Hofkleriker* の意で、王妃と王女教育係 (*meister* , 7709行) である。この教育係の習得していた教養は、(1)歌唱と弦楽器の演奏 (2)外国語 (3)礼儀作法である (7700 ff)。この後をうけたタントリスは王女イゾルトに、*buoch und seitspil* (7727行)、即ち「書物による知識・理論と弦楽器演奏」、(2)外国語、即ちフランス語とラテン語、(3)礼儀作法についての教育を受けた (7962 ff)。

アベラールが住み込みの家庭教師として、エロイーズに何を教えたかははっきりしないが、音楽と礼儀作法ではなくて、専ら学問であったように思われる。彼自身の言葉によると、「開かれた本の上をレクチュアの言葉よ

りは愛の言葉がかわされた。説明より接吻が多かった。私の手はしばしば本よりも彼女の胸の方にのびた」²⁰⁾。教育はおそらくラテン語の本をテキストとして、それを解釈したのであろう。教養のある人、知識人はまず何よりもラテン語の習得が条件だった。

§ 4 *capellanus* と *kanzlei* (文書局, 官房)

1) 封建制度が確立してゆくにつれ、統治機構が整備されてゆくのは自然の理である。行政や裁判が統治者個人の恣意的判断や、便宜的な慣習に頼ることができなくなり、より合理的な種々の規定や法が制定される。この場合範になったのは、「ひろく諸族を統治して、平和を与え法を布く」ことに秀でていた「ローマ人」²¹⁾の法規で、このユスティニアヌスの「ローマ法大全」が中世に甦ったのである。

具体的には12世紀初めのボローニャの法律学校の創設である。法律学校の創立者とされているイルネリウス (*Irnerius*. 1060頃－1125以後) は、西欧の最初の高名な法学者であった。1116～1118年に皇帝ハインリヒ V (1106－25) の裁判官 (*iudex*, Richter) を勤めた。彼は「ローマ法大全」をスコラ哲学の弁証法的、論理的方法で注釈し、またその卓越した教授法で多くの学生を集めた。学生はイタリアよりむしろアルプスの北の国からの外国人学生の方が多かった²²⁾。

ところがボローニャ以外の都市や外国からやってきた学生たちは、この町の法の保護を受けられなかった。そのため出身別に団体を結成して自らの権利を、集団の力で対抗し擁護した。また神聖ローマ皇帝の権威にもすがった。学生たちにドイツ語圏出身者が多かったこともあるが、学生の国民団と教師の団体 (コレギウム) の代表者たちは、1155年最初のイタリア旅行でボローニャに滞在していた皇帝フリードリヒ I に直訴した。皇帝はボローニャ市長に警告した。「いかなる人といえども学問に従事しようと思う人の滞在と往来を妨げてはならない」と。1158年にボローニャで学ぶ学

生たちを、都市裁判権から保護する法令が発布された²³⁾。

この皇帝のイタリア政策に決定的な影響を与えたのは帝国書記局長（Erzkanzler. 1156年以降）のライナルト・フォン・ダッセルである²⁴⁾。彼はニーダーザクセンの貴族の次男として生れたため、聖職につく運命にあった。1130年頃ヒルデスハイムの聖堂付属学校に入り、ついでパリで研修を続けた。1135年アベラルが再びサント・ジュヌヴィエーヴの丘で弁証法と神学を教えた時、彼の名声を聞いて多くの学生がヨーロッパの各地から集まった。その中にフライジングのオットー、イギリスのソールズベリーのジョン（ヨハネス）、北イタリア、プレッシアのアルノルドらと共に彼ライナルトの名も見られる²⁵⁾。

1156年フリードリヒ I の帝国書記局（Reichskanzlei）に入り、1166年には Protonotar に就任。その間シュタウフェン朝のイタリア政策に深く関与し、1160年には教皇選出の問題でパヴィーアの公会議に出かけた。1165年には北フランスのルーアン（Rouen）で、イギリスの王女マチルデとハインリヒ獅子公との婚約をとり決めた。1159年ケルンの大司教に選ばれたのは、皇帝の強い推挙があったからである。

貴族の生れ－聖堂付属学校で修学－パリ留学－帝国書記局－皇帝の有力な側近－ケルン大司教と並べると、神聖ローマ皇帝フリードリヒ・バルバロッサの側近の人物像がイメージできよう。

2) この宮廷の書記局について述べておこう。文字で公的に記録すること、公文書の作成は、世俗の領主の宮廷に書記局が設けられて始めて可能になる。それまでは諸侯は書記（Notar）を持たないまま統治していた。裁判の判決は口頭で申し渡され、封土授与はドイツでは法的に抱束力のある身振りによって行われ、文書によって保証されることはまれであった。国や領国の統治が複雑化してゆけば法規、布告などの公文書、証書、書簡などの作成という仕事が必然的に随伴するもので、こうした文書活動は、Hofkapelle（*lt. capella* 宮廷礼拝堂）で行われた。

ところで *capella* は、(1) 本来は聖マルティン²⁶⁾の聖遺物である *cappa* (カッパ, マント) に由来する。この聖遺物を他の宝物と一緒に保管した場所を *capella* というようになった (800年頃)。(2) ついで *capella* の聖職者たちも *capella regia* (宮廷司祭) ということもあった。一般には *capellanus* (現代ドイツ語 *Kaplan*, *engl.* *chaplain*, *fr.* *chapelain*), または *clerius de capella* (*clericus* = *dt.* *Kleriker*, *fr.* *clerc*, *engl.* *clerk*) と言った。(3) この礼拝堂の、あるいは宮廷の聖職者たちに公文書一般に関する業務が託されるようになり、その長である *Erzkapellan* が統轄した。書記は *Notar* と言い、当然ながらラテン語を心得ている聖職者である。

自分の宮廷で文書類を最初に発行した世俗領主は、北ドイツ、ブラウンシュヴァイクのハインリヒ獅子公である。一般に自前の *Kanzlei* が形成されたのは、12世紀の中頃からで、その頃帝国の *Kanzlei* の文書の往来も増加している。*Kanzlei* の人員もふえつづけ、組織も強化されていった。*Kanzlei* (書記局) で働く者は当然公文書の作成や処理能力が要求され、とりわけ法律、修辞学、弁証法を学ぶ必要があった。

3) ここで中世盛期のドイツ文学作品におけるこうした語の使用例をみてみよう。聖職者には、通常 *priester*, *pfaffe*, *kapellân* の語が当てられているが、その相違は必ずしも明瞭ではない。

(1) 「ニーベルンゲンの歌」では、ブルグンドの一族がドナウ河を渡る時、水の乙女^{ニンフ}(妖精)がハゲネに向かって予言した。「*kappelân* の他は誰ひとり生きて帰れません (1589.2)」と。この同じ聖職者を *pfaffe* と言い、*priester* と言っているが、三つの相違はなさそうだ。

(2) 同じことがヴォルフラムの「パルチヴァール」にもみられる。隠者トレフリツェントのパルチヴァールに対する訓戒の中で (502詩節), *pfaffe* を3回繰り返す、そのすぐ後で今度は *priester* を2回繰り返している。何れも俗人に対しての聖職者とか司祭の意である。なおパルチヴァールの義兄フェイレフィースの息子は、インドで布教に従事するのだが、彼の名は *priester*

Jôhan である (822,25)。

(3) ハルトマンの作品には、*priester* の使用例はない。*pfaffe* は「エーレク」, 「ハインリヒ」に各1回, 「イーヴェイン」, 「グレゴリーウス」に2回で、*kappelân* は「エーレク」に1回である。ただし建物としての *kapelle* (礼拝堂) は6回使用されている。

(4) ゴトフリートの「トリスタン」には、*kapellân*, *priester* の使用例はない。*pfaffe* は5回で、82頁でのべたアイルランドの宮廷の *pfaffe* (7697行、Hofkleriker の意) を除いてはすべて俗人に対する聖職者、司祭の意である。興味あるのは神明裁判の章で、ロンドンの公会議 (Konzil) に列席の聖職たちをそれぞれ違った語で使いわけている。*pfafheit* (15304, 聖職者たち), ロンドンの *bischof* (15348, 司教), *pfaffen unde leien* (15312, 聖職者と俗人), (教会法をよく心得ている学識ある) *antiste* (15305) と。*antiste* (< *lt. antistes*) は本来「上席者, 長」の意であるが, ここでは *Antistes*, *Prälat* (高位聖職者) を指す。法律・教会法を学んだ高僧である。このような会議では彼らの専門的知識を必要としたのであろう。

聖職者の役柄, 職務内容を心得ているゴトフリートは, 騎士身分ではなく, 聖堂付属学校で学んだ経験のある *Capellanus* ではなかろうか。

§ 5 *litteratus* — 皇帝, 王, 諸侯のラテン語の教養

1) アーサー王文学を確立したフランスの作家クレチアンの作品を, 最初にドイツ語で翻案したハルトマン・フォン・オウエ (1160 / 65–1210 / 15) は, 小品「哀れなハインリヒ」のプロローグ冒頭で, 簡単に自己紹介をしている: 「あるひとりの騎士が, 学識 (*gelêret*) があったので, 書物に書かれているものはなんでも読んだ。この人の名前はハルトマンと言い, アウエの従士 (*dienstman*) であった」(1–5行)。

gelêret は Benecke の中世ドイツ語辞書によると, 「授業を受けた」という意味である。この箇所を Lambertus Okken²⁷⁾ は, 次のように訳している:

「Ein Ritter war lange genug zur Schule gegangen, daß er alles aufnahm, was er las. (さる騎士が学校で十分に学んだので、読んだものはすべて理解することができた。)」²⁸⁾。この場合「読む」は、「ラテン語の本を読む」ことであり、それ故 *gelêret* はラテン語の読み書きを学んだ人をいう。更にコメントすれば、修道院か大聖堂の付属学校で（あるいは私的教師について）少なくとも Trivium（三科）の基本的学科、文法と修辞学について学んだ人で、ラテン語の *litteratus* である。

ハルトマンの聖者伝説「グレゴリウス」の主人公は、少年時代修道院で *gramatica*（ラテン語、ラテン文学）、*theologia*（神学）、*lêgês*（法学）を学んでいる（1181 ff）。それを根拠に、ハルトマンは生地に近い Boden 湖畔のライヘナウの修道院で学んだと推測する学者がいる。当否は別として、こうした学校教育を受けるのは、通常聖職者を志す者、しかも貴族出身者（ライナルトのように）が多かったので、ハルトマンが自称する *dienstman*（下級騎士、従士）がそのような学校で学んだということは考えにくい。領主の特別の配慮があったのだろうか。それとも正規の修道士になる前の修練士（Novize）のための学校（*schola interior*, Novizenschule）で学んだのだろうか。

フランスのクレチアンは作家活動を、古代ローマの詩人オウィディウスの翻訳・翻案から始めている。彼の身分も定かでないが、七自由学科の少なくとも三科（文法、修辞学、弁証法）を修め、ラテン語は読むことができたのであろう。彼はいわゆるクレール（*lt. clêricus. fr. clerc.* 学僧）ではなかったか²⁹⁾。

2) 教養のあるなしは、ラテン語が自由に駆使できるかどうかが決め手であった。教養のある人、知識人と呼ばれうる人は大部分聖職者であった。俗人は諸侯はもちろん、王、皇帝も通常大半が *illitteratus* 即ち読み書きが出来なかった人、基本的な（学校）教育を受けてない人、Analphabet（文盲の人）であった。俗人の支配者はそれ故、統治に伴う文書作成のために聖

職者をそばにおく必要があった。

オットー大帝 (912-973) は、読むことを習ったのは30才の時である。王妃イーディス (Edith, Editha, 最初の夫人) の死後に文字を学び、書籍を読み、理解することができた。コンラート II (1024-39) は「自分の名前が書けなかった」。

12世紀後半になってもドイツの諸侯は *illitteratus* であった。1157年ブサンソン (Besançon) の帝国議会で教皇ハドリアヌス IV (1154-59) のラテン語の書簡が読みあげられた時、列席の諸侯は誰も理解できなかった。帝国書記局長ライナルト・フォン・ダッセルが翻訳し、注意深く説明して初めて諸侯たちはひどく憤慨したと、*Gesta Frederici* (フリードリヒ I の事績) に記されている。

3) 世俗の領主で、正式には読み書きを学ばなかったけれど、ラテン語やラテン文学を理解しようと努めたものもいる。皇帝フリードリヒ I は、クレモナの司教 Sicardus の証言によると “*illitteratus*” であったが、彼の伝記作者 Rahewin によると、「皇帝は母国語においては非常に能弁である。ラテン語は話すよりは聞く方がよくできた」(*Gesta Frederici*)³⁰⁾。これは何故かカール大帝の教養について述べたアインハルトの言葉に似ている：「大帝は語彙も豊かで、淀みなく話した…きわめて明快に表現できた。母国語だけに満足せず外国語の勉強にも精を出した。なかでもラテン語は、いつでも母国語と同じようにしゃべれるほどに習得した」³¹⁾。二人とも子弟の教養には熱心だった。フリードリヒ I は2人の子供 Heinrich VI (1190-97) と Philipp von Schwaben (1198-1208) には入念な教育を受けさせた。兄弟ともラテン語の教養を身につけていた。弟の方は初めは聖職者の道を進むことになっていたが、後還俗して帝位を継いだという事情があった³²⁾。なおハインリヒ VI は大ハイデルベルク歌謡集の冒頭を、王冠を戴いた肖像画と三つの歌で飾っている。

Heinrich der Löwe (1129頃-1195) は古い歴史書を集め、書き記させ、

自分の前で読ませた。この場合ラテン語の書を読ませてそのまま理解できたのか。それともドイツ語に翻訳されたものを読ませたのかは不明である³³⁾。ただハインリヒ獅子公の妻はかのエレアノール・ダキテーヌの娘マチルダ（1156－89、1168結婚）であり、リチャード I（獅子心王、1157－99）とは義兄弟の間である。アンジュー王朝の文化と教養の刺激を受けていたであろう。獅子公はブラウンシュヴァイクの宮廷のすぐそばに Hauskloster（自家修道院。現在の Dom）を建て、ここが実質的に Kanzlei（文書局）の機能を果たした。なおハインリヒ公はこの修道院の Kaplan たちに「*Lucidarius*」を作成するように命じている³⁴⁾。この題は Leuchtnern の意、内容は一種の信仰と知識の教理問答書で、最も古い中世ドイツ語散文の作品である。

同じようなことが、Thüringen の方伯ヘルマン I（†1217）についてもいわれている。「方伯は聖書の一節か、昔の領主たちの有名な事績を聞かないうちは自分の疲れた四肢を眠りにゆだねることはなかった。彼は自分のたえず聞こうとしている耳をラテン語とドイツ語の作品に傾けた」³⁵⁾。

この場合は明らかに領主称賛のトポスであり、どこまで真実なのかは検証できない。方伯の宮廷は、この時代宮廷文学の中心地の一つで、多くの詩人が訪れている、方伯自身フランス文学には関心を持っていたのは確かである。方伯は、ハインリヒ・フォン・フェルデケに「*Eneit*」を、ヘルボルト（Herbort von Fritzlar）に「トロイ戦争」を、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハに「ヴィレハルム」を書かせているが、原本はフランス語の作品である。アルブレヒト（Albrecht von Halberstadt）もヘルマン方伯の委託を受けて、オウィディウスの「変身物語」を書いているが、これだけはラテン語の原典からの翻訳である。

がいしてドイツの諸侯は、ラテンの文学よりは、新しいフランスの宮廷文学に興味を持っていた。

4) 国王や支配者の理想像は、西欧中世においても常に求められ、様々な形で示された。ソールズベリーのジョンはきびしく箴言の形で言う：「無

学の国王は王冠をかぶったロバ(馬鹿)にすぎない」³⁶⁾と。なおジョンは「学問の知識のない人は、読み書きができて *illitterati* だ」としている (*Metalogicus*)。

フランス王ロベール II (敬虔王。996-1031) は、ランスでオーリヤックのジェルベール (Gerbert d'Aurillac. 後の教皇シルヴェステル II [999-1003]) から「神をよく知る国王」となるようにときびしい教育を受けた。ジェルベールは当代随一の学識豊かな人物で、若い時スペインに出かけてイスラエルの新しい学問を学んだ。

フランス南西部アキテーヌ公、ポワトゥー (Poitou) 伯の宮廷はすでにギョーム III (†1030) の時代に、学問と文学活動の中心地であった。当時の傑出した学者たち — シャルトルのフルベール (Fulbert. 960頃-1028) や、北イタリア、ヴェルチェッリ (Vercelli, ピエモンテ州) の Leo (998-1026) と文通していた。フルベールはローマ近郊の生れ、シャルトルの運営に当たった司教。レオは広い教養と法律の知識で卓越した聖職者。「公 (ギョーム III) は子供の時から学問を学び、文学についての知識を有していた。彼は本を筆写させ、見事な蔵書を持ち、宮廷の仕事のひまな時は読書に没頭し、夜も眠りに抗し難くなるまで読書していた」と、歴史家 Ademar (†1034) は書き記している。ギョーム III の孫がかの有名な最初のトゥルバドゥールのギョーム IX であり、その孫娘がアリエノール・ダキテーヌ、その娘がマリ・ド・シャンパーニュやハインリヒ獅子公の公妃になったマチルデである。学問と文学の華麗な一族と言えよう。

ドイツでは高位貴族の子息でさえその教育プログラムの中に、知的教育が取りあげられたのはまれである。ただ王の後継者たるべき王子・皇太子には、文学と学問の教育が配慮された。教師は普通 Hofkapelle の聖職者たちであった。

皇帝オットー III (980-1002) は、父の死後 3 才半で王位を継いだ (983 年)。実際に統治の責任を荷ったのは 994 年の刀礼の式以後のことであるが、

彼はベルンヴァルト (Kaplan Bernwald, †1022, 993以降 Hildesheim の司教) とギリシア人ヨハネネス・フィラガトス (Johannes Philagathos, オットーの母はビザンツ帝国の皇女テオファヌ [Theophanu, †991]) からすぐれた古典の教育を受けた。フランスのロベール敬虔王の師オーリヤックのジェルベール(後オットーの助力で999年教皇シルヴェステルⅡになった)と、ギョームⅢと交流のあった北イタリア、ヴェルチェッリのレオは、書記局長のヘリベルト (Heribert, 999年以降ケルンの大司教) と共に、オットーⅢの *Renovatio imperi Romanorum* (ローマ帝国の復興) の構想の形成に決定的な影響を与えた。

皇帝フリードリヒⅠの後継者皇帝ハインリヒⅥ (1191-97) は、父の配慮から、コンラート (Konrad von Querfurt, 帝国書記, 後のヴュルツブルクの司教。†1202) と、中部イタリア、ヴィテルボの Gottfried (1125-1200頃) について学んだ。Gottfried はバンベルクの大聖堂付属学校で学び、コンラートⅢとフリードリヒⅠの宮廷で Hofkaplan (司祭で書記) を、またハインリヒⅥの教育係を勤めた。歴史家でもあり、その大半の作品はフリードリヒⅠの統治時代に書かれ、「諸王の鑑」は若きハインリヒに献呈された。

§ 6 ラテン語教育

西欧中世における(高等)教育機関は大ざっぱに言えば (1) 11世紀までは修道院付属学校で行われ, (2) 12世紀には都市の司教座聖堂 (カテドラル, ドイツではドームという) の付属学校に移り, (3) 大学の成立までは主として教師を中心とした諸学校が栄え, (4) 以後はパリ大学 (1200年創建) と法律を主にしたイタリア, ボローニャ大学がその任務を継承した。

1) 修道院付属学校

修道院 (dt. Kloster < lt. *claustrum*) は、本来「周囲から孤立し、隔離された」修道会の人々の共同住宅の意である。世俗を絶って、使徒の清貧

の生活を送るのが目的であるので、人里離れた辺鄙な土地に居住地を選んだ。そのため集団生活を可能にする諸設備を整えなくてはならなかった。豊かな水と耕地を確保し、修道院内には、聖堂と回廊、食堂、寝室を含む居住用の部屋などの他に、穀物倉庫。製粉所や、靴、鞍などの作業場から家畜小屋まで備え、ほぼ完全に自給自足できたのである。

現存する9世紀初期の「ザンクト・ガレン修道院プラン」³⁷⁾を見ると、中世の修道院生活をイメージすることができる。西欧の修道院生活は聖ベネディクト(480頃-550/53)の戒律に従っているが、“*Ora et labora*”(祈りかつ働き)のモットーの示すように、労働の価値が重視されていた。修道院における労働は耕作や飼育労働だけでなく、学問的活動も含まれていた。キリスト教及び古典古代の著作物の筆写や翻訳作業である。

カール大帝の時代、アーヘンの公会議(789年)で、各修道院に学校を設けるように定められた。先程の修道院プランを見ると、付属聖堂の北東の角に筆写室(スクリプトorium、1階)と図書室(2階)とともに、二つの学校がある。一つは北側の院外学校(*Äußere Schule, schola exterior*)と、もう一つ東側の小聖堂の南に修練士のための学校(*Novizenschule, schola interior*)がある。Novize(修練士)は、共同のミサのために必要な詩篇、聖務日課の聖歌と賛美歌を暗誦しなければならなかった。次に修道院規則、聖書の解釈及び教父のテキストを学習する。修道士の前提条件とされる基礎知識である³⁸⁾。

ゴットフリート・フォン・シュトラースブルクの描いた少年トリスタンの教育は(Tr. 2056-2143)、宮廷教育をモデルにしているのに対して、ハルトマンの少年グレゴリウスの受けた教育は、修道院の教育に拠っているのであろう。

9世紀中頃から10世紀初期まで、ノルマン人、サラセン人、フン族の侵攻により、フランク王国の各地の多くの修道院が破壊され、修道院生活も衰退した。

だが11世紀後期の知的中心地であった北フランス、ノルマンディーのベック修道院を忘れてはならない。すぐれた教師のいる所は、多くの学生を引きつけるという良き例である。トゥール(Tours)のアルクイン(Alkuin. †804)のように、またザンクト・ガレンの吃りのノートケル(Notker Balbulus. 840頃-912)のように、ベック修道院はイタリア、パヴィーア生れのランフランクス(Lanfrancus. 1010頃-1089)とその弟子アンセルム(1033-1109)で高い名声をえた。ランフランクスは、ボローニャで法律を学び、すぐれた論理学者となったが、後論理学をすて神学をとった。トゥールの教師ベレンガリウス(Berengarius)と聖体について論争し、「キリストの肉と血について」の中で、彼の異端的解釈を反駁した。征服者ウィリアムは1070年ランフランクスを、カンタベリー大司教に任命している。アンセルムはランフランクスの後を追って、ベック修道院長(1078-93)に、ついでカンタベリー修道院長(1093-1109)に任命された。聖職者叙任権を守って、ウィリアムⅡとヘンリーⅠと争い、2度まで追放された。彼は研究と祈り、理性と信仰、知性と愛とを調和させようとした。「スコラ哲学の父」と言われるゆえんである。

Ebersbergの修道院長ヴィリラム(Williram. †1085)は、学識あり1065年頃「雅歌の釈義」をドイツ語で書き、そのラテン語の序言の中でランフランクス院長のベック修道院の大変な評判を語っている：「多くの同国人が彼のもとへ集まった」、やがて我が国にも新しい学識が実を結ばんことをと希望をのべている³⁹⁾。この修道院から教皇アレクサンデルⅡ、その他多くの司教、修道院長が輩出した。

教育内容について：カロリング時代以来おそらくすべての修道院では Trivium の三科(文法・修辞学・弁証法)と、少数の学校で Quadrivium の四科(算術・幾何学・天文学・音楽)も教えられたであろう。その中で一番多く学ばれたのは、天文学の領域の一部である Komputistik (*lt. computus*. 復活祭に基づく移動祝日の暦の算定法)である。

文法の学習はプリキアヌスの文法書か、ドナトゥスによった。次の学問分野に進むための準備としてであり、聖書の理解に役立てるためである。

文法の訓練と、論理学及び修辞学の学習のために用いられたテキストは、古典後期のキリスト教の著作者たち（ボエティウス [480頃－524頃、ローマの哲学者、政治家]、セドゥリウス [450年頃。メシア物語の作者] …）と、またローマの異教徒の著作者たち（ウェルギリウス、キケロ、ホラティウス、オウィディウス…）たちである。著作家の選択の際、異教徒の作品を拒否する派とこだわらず使用する派があった。

12世紀以後修道院学校は、その役を終えたように衰退していった。いろいろな理由があげられよう。(a) 修練士の採用年令が引き上げられた（クリュニーでは20才）。(b) 12世紀ルネサンスの時代に都市に新しい知的関心が生じ、修道院は魅力を失った。(c) 修道院（学校）はもともと修道院生活のための知識と技能の伝達に限られていた。新しい知識にこたえることが出来なくなり、*schola exterior*の必要性もなくなったことなど。これに対してはシトー派が真っ先にはっきりした態度をとった⁴⁰⁾。

2) 司教座聖堂付属学校

農村地帯にあった修道院は、12世紀には自分たちの殻に閉じこもり、新しい知の流れに扉をとぎした。それはロマネスク様式からゴシック様式への転換期にあたり、武勲詩から宮廷物語に関心が移った時期でもある。この頃世代交代を告げるように、多くの知識人が世を去っていった。

12世紀はいろいろな分野で変革をもたらした。それは時代の都市化の、合理主義的思考の、普遍に対する個人の自覚の、新しい人間観の当然の帰結である。人口増加、貨幣経済の発展、人と物の交流と情報の増加は、新しい状況を的確に評価するための法知識への関心をたかめ教育制度の変革を要求した。

法律家、書記、医師、教師と聖堂の司祭たちは、修道士に代る新しい教

養層を形成してゆく。

神に対する関係はより個人的に、友人関係になぞらえて理解し、修道女は自らをキリストの花嫁と考える。自然に対しても人間はより強い自意識をもって接し、純粋に経験的な態度で研究し始めた。アラビアの学問の刺激を看過できない。

時代がすべてを理性的、合理的に思考しようとすれば、二元論に近づき、異端に走り、西欧の文化のアイデンティティが脅かされる。弁証法の騎士アベラールと、正統派チャンピオン、シトー派の聖ベルナルの対決は、時代の緊張の反映と言えよう。

司教座聖堂付属学校は、原則として修道院学校を範にした。カロリング時代からテキストの解釈につとめ、自由学科 (*artes liberales*) が支配的であった。最も重要な教材は、シャルトルのティエリー (Thierry. 1142–1150 頃、シャルトルのベルナルの弟) の編集した「七自由学科教程」(*Heptateuchon*) である。授業で読まれた著作家は、ウェルギリウス、ホラーツ、スタティウス、ポエティウスたちであった。

長い間規範とされていたヴォルムスの司教ブルハルト (+1025) の法令集も、ある公会議の召集権限をめぐる矛盾と混乱が出てきて⁴¹⁾、法研究の必要が認識されるようになった。

またパリの東北ラン (Laon) で聖書の注解が始められたとき、その陳述の方法に関して、新しい方法論としての論理学の必要が問題になった。ランはランスと共に論理学と神学できわだっていた。

こうしたことがきっかけで、*quaestio* (質問) と *disputatio* (討論) を用いたスコラ的問題分析が発達し、11世紀後半から北フランスの大聖堂付属学校は名声を得た。とりわけラン、パリ、ランスにドイツ、イギリス、ハンガリーの学生が集まった。そしてフランスでの勉学はドイツの司教への言わば登龍門となった。すでに述べた Otto von Freising, Rainald von Köln の他に二三あげれば、ケルンの司教 Bruno II, Friedrich I, マインツの

司教 Adalbert II, Konrad I らである。

ハスキンズが有名な言葉を残している：「1100年にはまだ『教師が学校に先行する』が、1200年になると『学校が教師に先行する』と。1200年はパリ大学が認可された年である。聖堂付属学校も同じように、その名声は教師に依存していた。シャルトルは司祭フルベルトゥス（1006－28）によって興隆し、ボワティエのギルベルトゥスが去り、ティエリーが死んで、1155年以降衰退した。ランスはアルベリヒ（1118－36）のもとで栄え、ランはアンセルムス（＋1117）とラドゥルフス（＋1134 / 36）のもとで繁栄した。

3) 最後に教会付属学校の教育の基礎をなしている七自由学科 (*septem artes liberales*) にふれておこう。

11世紀末には学問はこの伝統的なカリキュラムの枠の中にほぼおさまられていたが、12世紀になるとアラビア文化と、アラビア語に翻訳されていたギリシアの学問が導入された結果、アリストテレスの新論理学と新しい数学・天文学を加えて充実し、法学・医学・神学がつけ加わった。

(1) 七自由学科は基礎研究である。古代においては、これらの研究はお金を稼ぐためのものではなく、「自由人」にふさわしいものであった。Martianus Capella（5世紀初め）、Boethius（＋524）とセルヴィアの Isidor（＋636）のような権威ある人たちによってこの七の数が規範として受け容れられた。三つの分野は四つの分野より、徹底して行われた。いわゆる Trivium（三科）は言語に関する学科で文法、修辞学、弁証法（論理学）を含み、Quadrivium（四科）は数学に関する学問で算術、幾何学、天文学、音楽を含む。文法は、正しく語り、正しく書き、書かれたものを正しく理解する学問である。生徒は最初にプリスキアヌスの「文法教範」を暗誦せねばならなかった。その際教師の鞭の力を借りることもまれではなかった。ドナトゥスの「上級文法」は上級者の教科書だった。

修辞学は立派に語り、書く術を教えた。弁証法（論理学）は抽象的思考の訓練を目的とする。ボエティウスの「アリストテレス範疇論入門」の注

解に拠って、論理的に推論して結論を出すことを教えた。

四科の算術は計算盤（Abacus）を用いて、計算の練習をした。幾何はユークリッドを範にして学び、天文学は惑星の運動の理論と、また占星術と結びつけて天体の人間に及ぼす影響を論じた。音楽はボエティウスの「音楽綱要」で、星の世界と人間と楽器における比率（調和）の学を教えた。

(2) フランスのソルボンヌ大学は四つの学部に分れていた：医学、法学、神学は上級学部で、これに対して学芸学部は予備教育の基礎部門であった。自由学科の Trivium はバカロレアで終了し、Quadrivium はマギスター試験をもって終了した。上級学部では教師の免許（*licentia*）とドクターが与えられた。

学芸学部に所属している者はパリで四つの国民団に分れていた：フランス、ピカルディ、ノルマンとイギリス（ドイツ）。パリは聖職者の教授陣をもつ、教授の大学の原型であり、ボローニアはこれに対して非聖職者の教授陣をもつ、学生の大学である。オックスフォードは、1167年ヘンリーⅡの命で建てられたのだが、ソルボンヌをモデルにしている。イタリアのパドヴァ（1222）とシエナ（1246）は、ボローニアの分校である。

多くの町に保存されている学生名簿から推定すると、13世紀パリの学生は約4000～5000名、オックスフォードは3000～4000名であった。至る処で同じラテン語が用いられていたので、真にヨーロッパ的教育の交換が行われた：学生たちの群が法律を学ぶためにボローニアに行き、医学を学ぶためにサレルノやモンペリエに、神学を学ぶためにパリに行った。ヴァガテン（ゴリアルディ）は遍歴や酒や恋を、学問より好んだであろうと思われるが、あるいはこれはカルミナ・ブラーナやケンブリッジ歌謡集のようないわゆるヴァガントの文学のせいであろうか⁴²⁾。

ラテン語は、エスペラントのように単なるコミュニケーションの道具ではなかった。ラテン語を通して過去の古代のローマ文化の受容を可能にし、

同時にギリシア、ローマとキリスト教文化を精神財として共有している知識人の間の知の交流を可流にする共通語でもあった。ラテン語は知識人の連帯のシンボルであった。他方生活用語である自国語と抽象的な普遍言語であるラテン語の共存は、民族間の相互理解を容易にしたし、また新しきものの創造を促したであろう。

主 要 文 献

- (1) Bumke, Joachim : Höfische Kultur. 2 Bde. 1986 .
- (2) E.R. クルツィウス / 南大路, 岸本, 中村訳 : ヨーロッパ文学とラテン中世。1971 .
- (3) C.H. ハスキンス / 別宮, 朝倉訳 : 12世紀ルネサンス。1989 .
- (4) C.H. ハスキンス / 青木, 三浦訳 : 大学の起源。1977 .
- (5) Latein und Volkssprache im dt. Mittelalter. Regensburger Colloquium 1988. Hrsg. N. Henkel und N. F. Palmer. 1992 .
- (6) Weddige, Hilbert : Einführung in die germanistische Mediävistik. 1987 .
- (7) 兼岩正夫 : ルネサンスとしての中世, ラテン中世の歴史と言語。1992 .
- (8) A. ジェラルド / 池田訳 : ヨーロッパ中世社会史事典。1991 .

注

1. 長兄ロタールの死後ロタール王国は、両国に分割された。
2. ローマのカエサルが、ガリアの全土を征服したのは、紀元前一世紀の中頃である。
3. オック語とは、中世において *oui* (= yes, はい) を *oc* (オック) といったロアール川以南の地域の方言の総称。これに対してその北方の方言を *oil* (オイル) 語と言う。
4. A. ジェラルド : 同書, 35頁。
5. Kenkyusha's New English - Japanese Dictionary. XX; なおブラッドリ : 英語発達史 (岩波文庫) 96頁以下によると、英語に借入されたフランス語は

- 2種類あって、一つは北フランスのノルマンディーのフランス語、他の一つは中央フランス語、パリのフランス語である。
6. Anglo-Norman. ノルマン人の英国征服後約3世紀の間公用語として用いられたフランス語方言で, Anglo-French, Norman-French とも言う。
 7. ル・ゴフ / 柏木・三上訳: 中世の知識人。1977. 87頁。
 8. ティエリ / 小島訳: メロヴィング王朝史話 (上), 1992. 12頁以下参照。
 9. ケーギ, ヴェルナー / 坂井訳: 世界年代記。1990. 32頁。
 10. Wace, Robert. 12世紀の初め英仏海峡フランス寄りのジャージー (Jersey) 島生れ, Caen で学び, パリまたはシャルトルで勉学を終え, Magister Artium を得る。
 11. ハスキンス, 同書。231-232頁。
 12. Hrotsvit von Gandersheim, Sämtliche Dichtungen. Aus dem Mittellateinischen übertragen von O. Baumhauer, J. Bendixen u. Th. G. Pfund. 1966.
 13. Langosch, Karl : Waltharius · Ruodlieb · Märchenepen. 1956.
 14. ハスキンス: 同書。148頁以下; 新倉俊一: ヨーロッパ中世人の世界。1983. に収録の「中世の知識人, アベラールとその後裔たち」。
 15. 早くも10世紀にはサンスの大司教ワルテルスが法令で非難した。13世紀に入ると, 教皇や公会議の名で激しい罰則を伴う禁止令が出た。(ハスキンス。148頁; 新倉。31頁参照)。
 16. Carmina Burana Die Lieder der Benediktbeurer Handschrift Zweisprachige Ausgabe. 1979; 永野藤夫訳: 全訳 カルミナ・ブラーナ 1990.
 17. アルキポエタの「皇帝讃歌」33詩節で, ライナルトを *Archicancellarius* と職名で呼びかけている。 *cancellarius* は Kanzler の意である。
 18. Langosch, Karl : Hymnen - und Vagantenlieder. 1954.
 19. ピエール=イヴ・バデル / 原野訳: フランス中世の文学生活。1993. 48頁; アンドレーアス・カペルラヌス / 瀬谷訳: 宮廷風恋愛について。1993. 232頁。
 20. Abaelard : Der Briefwechsel mit Heloisa, übersetzt von H. W. Krautz.

1989 . s. 16 .

21. ウェルギリウス / 泉井訳：アエネーイス（上）。第六巻，850行以下。
22. ハスキンス：同書。167頁以下；グイド・ザッカニーニ / 児玉訳：中世イタリアの大学生生活。1990. 11頁以下。
23. イルネリウスの歿後後継者たちーヤコブス，ブルガルス，マルティヌス，ウゴも，皇帝フリードリヒ I の顧問を勤めた。
24. Rainald von Dassel については，次の資料を参考にした：Lexikon des Mittelalters. 7 Band, 2 Lief. ; J. Bumke : ibid. 93, 97, 101, 113, 604, 642, 644 f. ; 北嶋繁雄：ライナルト・フォン・ダッセル（愛知大学文学論叢 100, 1992）。
25. Abaelard : ibid. Lebensdaten Abaelards und Heloisas. s. 366 .
26. トウールのマルティン（マルタン。316 / 17-397）。メロヴィング・フランク王国の守護聖人。聖人譚によると，聖マルチンがローマの戦士であった頃，アミアンの城門のそばで寒さに震えている乞食に自分のマントを半分切って与えたという。なおノトケルスは「カロルス大帝業績録」に次のように書き記している：「この『カペラ』という名称は，フランクアの歴代の王が護身符として，かつ敵を威圧するため，常時戦場へ持参していた聖マルティヌスの法衣^{カツパ}に由来し，彼らは帝室礼拝堂をいつもそう呼びならわしていた」（国原吉之助訳，62頁）。
27. Okken, Lambertus : Hartmann von Aue erzählt. 1992 . s. 393 .
28. 同じようなことを，「Iwein」の Prolog の21-30行でも述べている。
29. ジャン・フラピエ / 松村訳：アーサー王物語とクレチヤン・ド・トロワ。1988. 14頁。
30. Bumke : ibid. s. 607 f.
31. エインハルドゥス，ノトケルス / 国原訳：カロルス大帝伝。1988. 35頁。
32. Bumke : ibid. s. 603 .
33. Bumke : ibid. s. 608 .
34. J. Bumke : Geschichte der dt. Literatur im hohen Mittelalter, 1990 . s. 93f.
35. Bumke : ibid. s. 608 .

36. Bumke : ibid. s. 596. この言葉は本来イギリスのヘンリ I (1100-35) が、無教養の父ウィリアム征服王(1066-87)の前で言ったと伝えられている(「イギリス諸王の事績」)。これを2, 30年後にジョンが「*Policraticus*」(1160?) に引いたとされている。なお H. Brinkmann : *Entstehungsgeschichte des Minnesangs*. 1926. の19頁及びその注1と、クルティウス : 同書。264頁の注22を参照。
37. Weddige : 同書。s. 46 ; ハンス・ヴェルナー・ゲッツ : 轡田他訳 : 中世の日常生活。1989, 116頁。
38. *Lexikon des Mittelalters*. Band 5 . s. 1226 f ; Buchberger, Michael : *Lexikon zur Theologie und Kirche*. 1934 . 55 f.
39. Bumke : ibid. s. 93 .
40. シトー派の聖ベルナルド (Bernardus . 1091-1153) は、正統信仰のチャンピオンで、キリスト教の実践を奨励することに熱心であって、本来の意味での哲学者でも神学者でもなかった。「私にとって哲学は何であろう? 私の師は使徒たちである。使徒たちはプラトンの読み方やアリストテレスの煩瑣な理屈の解きほぐし方などは教えてくれなかった…。しかし生きることを私に教えてくれたのである。私は確信をもって言うが、これは断じてちっぽけな知識ではない」(ジョノー / 二宮訳 : ヨーロッパ中世の哲学。1981, 73頁。
41. Fuhrmann. Horst : *Einladung ins Mittelalter*. 1987 . s. 178 f.
42. Weddige : ibid. s. 48 ff ; *Lexikon des Mittelalters*. Domschule の項。

